
Eternally

小羽 朔夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Eternal

【著者名】

小羽 朔夜

N5538D

【あらすじ】

「ねえ、永遠を信じてる?」「貴方は永遠を信じてますか?貴方なりの答えを見つけて下さい。

黄昏。誰そ彼。そう呼ばれる時間帯。この図書館にも淡く夕陽が差し込み、本の背表紙も本棚も赤く染まる。その光景はまるで全てを炎に呑み込まれてしまつたようで、失つてしまつた気がして怖くなる。

そして、徐々に優しい紫色に変わるので見て私は今日もまた安堵するのだ。

繰り返し、繰り返し。

まだ、これらは価値を失つていい。まだ、失つてしまつてはいいい、と。

何時になつたらこんな自虐じみた真似を止めるのだろう。もう何回繰り返しただらう。何度も繰り返したせいで習慣になつてしまつたこの癖から脱することは出来るだらうか。これまた癖になつてしまつている本日何度目かのため息をついた。

ふと、本棚から視線を少しずらしてみるとやはり彼がいた。中庭で相変わらず樂しそうに友達と騒ぎ合つてゐる。今日はうつすらと雪が積もり、まだ降りやまないと天気予報でも告げていたのに。こんな時、男の人があいつまでも子供だという世論に頷きそうになつてしまつう。

きっとそのうち、いつものように。寒いと喫きながら図書館に押し入つて来ることを思うと知らず知らずのうちに笑みが溢れていた。

「ねえ、永遠つて信じてる?」結局いつものように指先や顔を寒さで赤くしながらストーブの前に陣取つた彼が真剣な顔をして言つたその言葉が、本を読んでいた耳にもやたらと響いて聞こえた。しかし、それに返る言葉は聞こえてこない。訝しんで顔をあげればこちらを向いて返答を待つてゐる彼がいた。

「私？」

「うん。ねえ、信じてる?」

「信じてると言えば嘘になるかな。どうして?」

「なんとなく? 気にすんな。」

「そつか…」

彼の、この“なんとなく”の音がすんなり胸に染み入ったのが分かる。許容するようでいて、理解を放棄しているような。本当に何気無く感じて何気無く言葉にしてみた感じ。

私みたいに「いちや」いちや後から理由をくつづける訳じゃない。ありのままに述べた感覚。

それが“なんとなく”好きだった。

「いつ帰る? 夕陽は沈んだけど。」

本当にいつこうこうは分かつてやつていよいよだから、余計にタチが悪い。つい、全部分かつていてやつてるんじゃないかと勘繰りたくなる。

「ん~、もう帰るよ。雪積もっちゃったし。」

「そうか、じゃあ俺はもう少しいるから。口ケるなよ~」

「うん、また明日。」

「お疲れ~」

彼と図書館に別れを告げ、独り帰路に着く。雲が所々かかってはいるものの、もう空には星が瞬いている。そして光を反射して星に負けず劣らず煌めく雪の粒は中々やむ気配は無く、後から後から降り続けていた。

「永遠、ね……」

何故急にそんなことを聞くのだろう。理由は“なんとなく”であることは分かっているけれど。

永遠なんて、生き物には到底望めないモノに、なんで名前なんか付けてしまったのだろう。認識したところで手は届かないのに。いくら欲しがったところで絵空事に過ぎないのに。そんなモノは私には信じられない。

「なあんか、追いつにちゃつた？珍しく歩くの遅いね。考え事？」気付けば大分ゆっくり歩いていたようでは追いつかれてしまっていた。

「ううん、坂が恐いから。冷たい思いも痛い思いも嫌だし。」

「一回転べば一回も二回も変わんないって。それに上見て歩いてる時点で危ないじゃん。」

「それ、転ぶのを期待してるつて言つてるよつて聞こえるんだけど。」

「氣のせい、氣のせい。てか、俺のが転びそつ。」

そう言いながらも器用にスピードは緩めずにトツトツ行つた背中が少しずつ小さくなつていぐ。かと思えば、彼はおもむろに立ち止まり振り返つていた。そして、私が追いつくのを確認して、また歩き出す。それを何度も繰り返したところで、やっと坂を下り終えた。

「ねえ、永遠を信じてる？」今度は私が聞く。

「うん。何事もさ、信じることの大切だから。そこであつてもなくても俺は信じたいと思うよ。みうみう」

「すうじいね。私は……、永遠なんて信じられなかつた。信じたかつた

けど、何もなかつたから。すぐに壊れて失つてしまつ氣がしてた。

でも分かつた。永遠は永遠じゃないんだね。」

「よく分かんないけど。まあ、いいんじゃない?」

そういうと彼は笑つた。またあの、“なんとなく”の感じ。またひとつ永遠になつた。

“永遠”は“永遠”だけ。自分で中で“永遠”にすれば良い。覚えていられるだけ、美化したり劣化したり、一人思い出してニヤケてみたり、懐かしく思つて。時には誰かに話しながら、少しずつ形は変わつてしまつたとしてもそんな風に大切にしていけば、それはきっと自分の“永遠”になるから。そして、それは未来の自分が支えてくれる筈だから。

「…ありがと。」

「え? 何が?」

「うん、なんとなく?」

「そつか。」

「うん、そう。あ、明日は夕陽が沈む前に帰るから。夜危ないし。
転ぶから?」

「今日まだ転んでないからつー。転ぶからじやなくて、ほら不審者とか…」

「ああ、危ないよね。此処に一人いるし。」

「うわ、ひどい!」

「良かつたね。」

「え?」

「…なんでもない。」

こんな他愛ない会話も何気無い時間もいつか、私を支える“永遠”になるんだろう。

(後書き)

どうしても書きたいKeyが“なんとなく”と“永遠”でした。場面は予め考えてあったにも関わらず、形にしてみたら何故か長くなつてました。

これから、送別シーズンですね。別れるのは辛いけれど、こう考えると少し貯金をしている気分が味わえるかと。それが私なりの答えです。

最後まで読んで下さりありがとうございました。感想など書いて頂けると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5538d/>

Eternally

2010年12月31日18時44分発行